

# 小学校家庭科の指導実態と意識（第1報）

—— 島根県の家庭科担当教員の場合 ——

多々納 道子\*・安食 香子\*\*

Actual Conditions and the Consciousness of the Teachers toward Homemaking Education in Elementary Schools (1)

— in Case of Teachers in Charge of Homemaking of Shimane Prefecture —

## I 目 的

高校まで家庭科の男女必修を実施し、教育効果をあげるには、解決しなければならない課題が山積している。家庭科を女子教育とみなすことになる伝統的な性別役割意識を変革することは、重要な課題の一つである。小学校の家庭科は、発足以来男女とも学んできたにもかかわらず、その他のどの教科よりも女らしいとみなされているのは、学習者に伝統的な性別役割意識が、作用していることによるものである。

このように小学校の家庭科と性別役割意識に関わる問題には、これまで家庭科を主に女子教員が担当してきたことが深く関わっているのではないかと考えられる。また、教員の家庭科に対する理解と情熱とが児童の学習意欲とその成果を左右すると指摘されるように、教科担当者の意識は重要である。男女教員がともに小学校の家庭科を担当できるようにするには、家庭科の担当方法や指導意識を検討する必要がある。そこで、男女が家庭科を指導できるための教員養成の基礎的な資料を得ることを目的とし、本報では、島根県における小学校家庭科担当教員を対象に、指導実態と意識を明らかにしたので、その結果を報告する。

## II 調 査

調査対象は、島根県内の全ての公立小学校の家庭科担当教員とし、310校に調査用紙を配布した。有効回答数は、477名であった。

調査方法は、質問紙法で郵送調査によった。

調査時期は、1988年10月上旬～下旬であった。

調査内容は、家庭科の担当方法、指導難易度、家庭科のとらえ方などであった。

---

\* 島根大学教育学部家政科教育研究室

\*\* 出雲市立北陽小学校

### III 結果と考察

#### 1. 調査対象者の概要

1) 性別 家庭科担当教員の内、男子教員は52名、女子教員は425名で、各々10.9%と88.1%を占めた。これまでに小学校家庭科の指導実態が明らかにされている府県や全国調査の結果と比較すると、島根県では男子教員の家庭科担当は極めて低率であった。

2) 年齢構成 男子教員は20代が51.9%、30代が32.7%で、両者を合わせると80%を越え、比較的年齢の低い教員が担当していた。女子教員では、20代、30代、40代および50代のものがそれぞれ約1/4を占め、年代間の差異はみられなかった。

3) 担当者の大学での専攻教科 大学での専攻教科の主なものをみると、男子教員は「体育」が25.0%で最も多く、「社会」が19.2%、「理科」が15.4%の順であった。女子教員は「家政」が20.5%を占めて最も多く、次に「国語」が17.2%、「音楽」が11.5%であった。

島根県における教員の大学での専攻教科の全体的傾向と比較対照すると、家庭科担当の女子教員に「家政」専攻者がやや多いものの、男女とも特定の専攻に偏するという傾向ではなかった。さらに、専科で担当している女子教員の専攻教科についてみると、「音楽」が34.0%、「家政」が19.0%であり、特に専門性が考慮されているとはいえなかった。

#### 2. 家庭科の担当方法

1) 家庭科担当年数 これまでの担当年数をみると、男子教員は、「0～4」年が90.4%とそのほとんどを占めていた。女子教員も「0～4」年が48.7%で最も多く、「5～9」年が25.6%であった。したがって、10年以上担当しているのは24.2%にすぎず、家庭科の指導歴から判断すると、いわゆるベテラン教員の割合が少ないといえる。小学校の家庭科は、5年と6年で学習するので、他教科と比較すると短いのは当然のことである。さらに、男子教員は女子教員に比べて短いというのは、家庭科の指導から疎外されていたともみなせる。

2) 担当方式 男子教員が家庭科を担当しているのは、「学級担任」によるものが90%以上と集中していた。その他は、「専科」が1名、「出張」が2名のみで、専ら「学級担任」によるといえる。これに対し、女子教員は「出張」が約40%と最も多く、「専科」と「学級担任」によるものは、それぞれ約1/4を占めていた。これらの家庭科担当方式には、 $\chi^2$ 検定によって、男女教員間に5%水準で有意差が認められた。男子教員の家庭科担当が極めて少ないのを補うため、女子教員が種々の方式で担当していることがうかがえた。

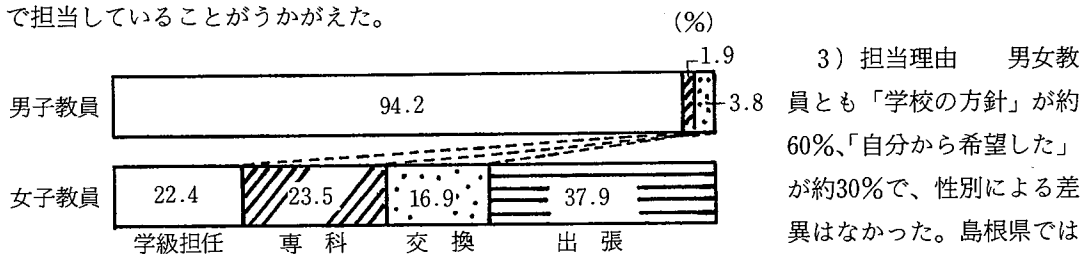


図1 家庭科担当方式

3) 担当理由 男女教員とも「学校の方針」が約60%、「自分から希望した」が約30%で、性別による差異はなかった。島根県では学校運営の方針として、教

員の担当時間数を平均化することが一般的に行われているので、低学年担任の女子教員に、「学校の方針」によって「出張」という方式で、家庭科を担当するものが多かったと考えられる。

さらに、2. 2)で述べた担当方式との関連をみると、「学級担任」方式には「自分から希望した」ものが、「出張」には「学校の方針」によるものが多く認められた。

4) 指導満足度 家庭科を担当してどのように感じるかの指導満足度を尋ねたところ、男女教員とも「満足」が約30%、「どちらともいえない」が約60%、「不満足」が約8%で、男女間に有意差はなかった。

2. 3)で述べたように、担当理由は「学校の方針」と「自分から希望した」とに二分されたので、担当理由によって指導満足が異なるかどうか、両者の関連を求めた。結果は表1のようであった。

表1 担当の理由と指導満足度の関連

(%)

	満 足		どちらともいえない		不 満 足	
	男子教員	女子教員	男子教員	女子教員	男子教員	女子教員
自分から希望した	50.0	54.7	50.0	41.5	0	3.8
学校の方針	22.6	19.5	67.7	70.1	9.7	10.4

$$x^2=15.3 > x^2_{0.01}=9.2 \text{ (df=2)}$$

男子教員で「自分から希望した」ものと、「学校の方針」によるものとを比較すると、前者の方に「満足」とするものが多く、両群間に $x^2$ 検定によって、1%水準で有意差があった。当然のことながら、自分から担当を希望したもののほうが指導満足度が高かった。女子教員も男子と同様に、「自分から希望した」ものの方が、指導満足度が高い傾向にあった。このように、家庭科の指導満足度は、指導意欲と関連が高く、家庭科のよりよい指導のためには、5、6年の学級担任になれば、積極的に指導しようとする意欲を持つ教員の養成が課題となる。

5) 望ましい担当方式 家庭科を担当している教員が、望ましいと考える担当方式とその理由を調査した。男女教員とも「学級担任方式」が最も多い割合で、男子が42.3%、女子が56.2%を占めた。次に「専科」で、男子が30.8%、女子が22.8%であった。「交換」と「出張」を希望するものは、2~10%と少数であった。実際には男子教員の大部分が学級担任方式で担当しているにもかかわらず、学級担任方式が半数以下にとどまったことは、学級担任方式であれば、自分が指導しなければならぬので、避けたものと考えられる。

女子教員は「出張」方式で担当している割合が最も多いのに、この方式を望ましいとしたのは、1.9%と極めて少数であった。これらのことから、女子では「出張」方式には指導上問題があり、否定的にとらえているものが多いといえよう。

愛知県の調査<sup>(8)</sup>では、専科を望ましいとして全体の65%が支持しており、島根県の教員よりも多くの割合を示しているが、男子教員の方がより多く支持しているというのは、同じ傾向であった。

さらに、現在の担当方式と今後望ましいとする担当方式との関連を分析した。結果は、表2の通りであった。

表2 現在の担当方式と望ましい担当方式の関連

(%)

		学級担任	専科	交換	出張	その他
学級担任	男子教員	42.8	34.7	10.2	4.1	8.2
	女子教員	62.1	19.3	7.6	1.4	9.6
専科	女子教員	50.5	28.6	3.8	1.0	16.1
交換	女子教員	38.7	24.0	26.7	0	10.6
出張	女子教員	58.2	23.6	4.8	4.8	8.6

男子教員の家庭科担当は、学級担任によるものがほとんどであったので、この方式で担当しているものが今後どの方式を望ましいとするかについては、男女間の比較・検討が可能である。

男女教員とも現在「学級担任」で担当しているものが、今後望ましいとするのは、「学級担任」が最も多く、次に「専科」、「交換」という順で、「出張」は極めて少なかった。男女教員間の比較をすると、女子の方が男子よりも「学級担任」を望ましいとするものは多く、「交換」や「出張」の希望は、男女とも少ないという傾向であった。さらに、女子教員では「学級担任」以外の方式で担当しているものにおいても、「学級担任」を望ましいとするものが最も多かった。その他の顕著な傾向として、「出張」を望ましいとするものは、どの方式においても5%に満たないほど少なく、最も支持されていなかった。

現在および今後望ましいとする担当方式との関連を明らかにするため、分割係数を求めたところ、男子0.28、女子0.30となり、男女とも両者の関連はあるとはいえないことが確認された。特に出張方式は、今後も望ましいと考えているものは極端に少なく、実際に家庭科を担当している教員からは、最も担当しにくい方法とみなされていることが理解できた。

では、どのような理由から望ましいとされるのであろうか。表3は、望ましい担当方式の理由を尋ねたものである。

学級担任方式が望ましいと答えたもので最も多かったのは、「子どもの実態を把握しているから」であり、男女教員とも90%以上を占めた。次は、「学級経営上、効果的だから」で男女とも70%以上であった。これらの理由は男女で一致して、しかも他の担当方式ではほとんどみられなかった。したがって、専科、交換および出張方式では、逆に子どもの実態を把握できないとか学級経営にあまり効果がないということができ、これらは家庭科を指導していくうえで重要事項といえよう。「家庭との連絡がとりやすい」は、男子は18.2%にすぎないが、女子では61.5%で、男女間で重視する度合が異なった。「男女の区別なく担当すべきだから」は、男女とも約27%で一致していた。女子では「授業時数の過不足が調整できるから」という理由も28.5%で重視されていた。

専科方式を望むものは「専門性が生かされるから」が最も多く、男女とも約87%を占めていた。次いで、「教材研究や準備がしやすいから」が約63~84%であり、この二つに集中していた。「指導に自信がないから」をあげているのは、女子では7.2%にすぎないが、男子では31.3%であった。男子はこれまで家庭科の学習や生活体験が希薄であるので、これらの数字には、指導することへの戸惑いが表現されているものと思われる。

交換方式が望ましいと答えた理由は、男子で「専門性が生かされるから」が66.7%、「指導に自信

表3 望ましい担当方式の理由

(%)

	学級担任		専 科		交 換		出 張	
	男子 教員	女子 教員	男子 教員	女子 教員	男子 教員	女子 教員	男子 教員	女子 教員
子どもの実態を把握しているから	90.9	91.2	0	1.0	0	5.4	0	0
学級経営上効果的だから	77.3	76.2	6.3	1.0	0	10.8	0	0
家庭との連絡が取りやすいから	18.2	61.5	0	3.1	0	2.7	0	0
全ての教科を指導すべきだから	13.6	7.9	0	0	0	5.4	0	0
男女の区別なく担当すべきだから	27.3	26.4	0	3.1	16.7	2.7	0	0
授業時数の過不足が調整できるから	13.6	28.5	6.3	12.4	0	32.4	0	12.5
専門性が生かされるから	0	1.7	87.5	87.6	66.7	45.9	0	25.0
教材研究や準備がしやすいから	4.5	15.1	62.5	83.5	16.7	27.0	0	12.5
指導に自信がないから	0	0.4	31.3	7.2	33.3	2.7	0	0
女子教員の指導の方が効果的だから	0	0	25.0	8.2	16.7	29.7	33.3	75.0
校内教員集団との連帯性が持てるから	0	0.8	0	7.2	0	27.0	0	0
教員の授業時数の調整が出来るから	0	2.5	25.0	24.7	0	48.6	0	37.5

(複数回答)

がないから」が33.3%で多かった。女子では「教員の授業時数の調整ができるから」と「専門性が生かされるから」が約46～49%で、次ぎに「授業時間の調整ができるから」、「女子教員の方が効果的だから」が続いていた。

出張方式がよいとする理由は、男子が「女子教員の方が効果的だから」が75.0%で最も多く、次ぎに「教員の授業時間の調整ができるから」が37.5%となっていた。出張方式がよいとする理由は、女子の方が指導しやすいとか、授業時間の調整が出来るなどの教員側からのものが大部分を占めていた。

以上みられるように、家庭科担当教員の意識から判断すると、学級担任方式が最も望ましいといえるが、男子教員の指導力にはかなりの問題点があるようなので、指導力を高める手だてが講じられなければならない。さらに、児童にとってどの担当方式がよいのかという観点も合わせて、総合的に検討する必要がある。

### 3. 指導難易度

学級担任による指導を積極的にすすめるには、指導意欲だけでなく、指導力のある教員の養成が求められる。そこで、実際に指導している教員が家庭科を指導しやすいとらえているのかの指導難易度を各内容別に尋ねた。

内容は現行と改訂によって1992年度から加わることになっているものを合わせて、5年は13項目、6年は14項目設けた。各々について、「大変指導しやすい」(5点)、「やや指導しやすい」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「やや指導しにくい」(2点)、「大変指導しにくい」(1点)の5段

階評定によって、平均値を求めた。結果は、図2と図3の通りである。

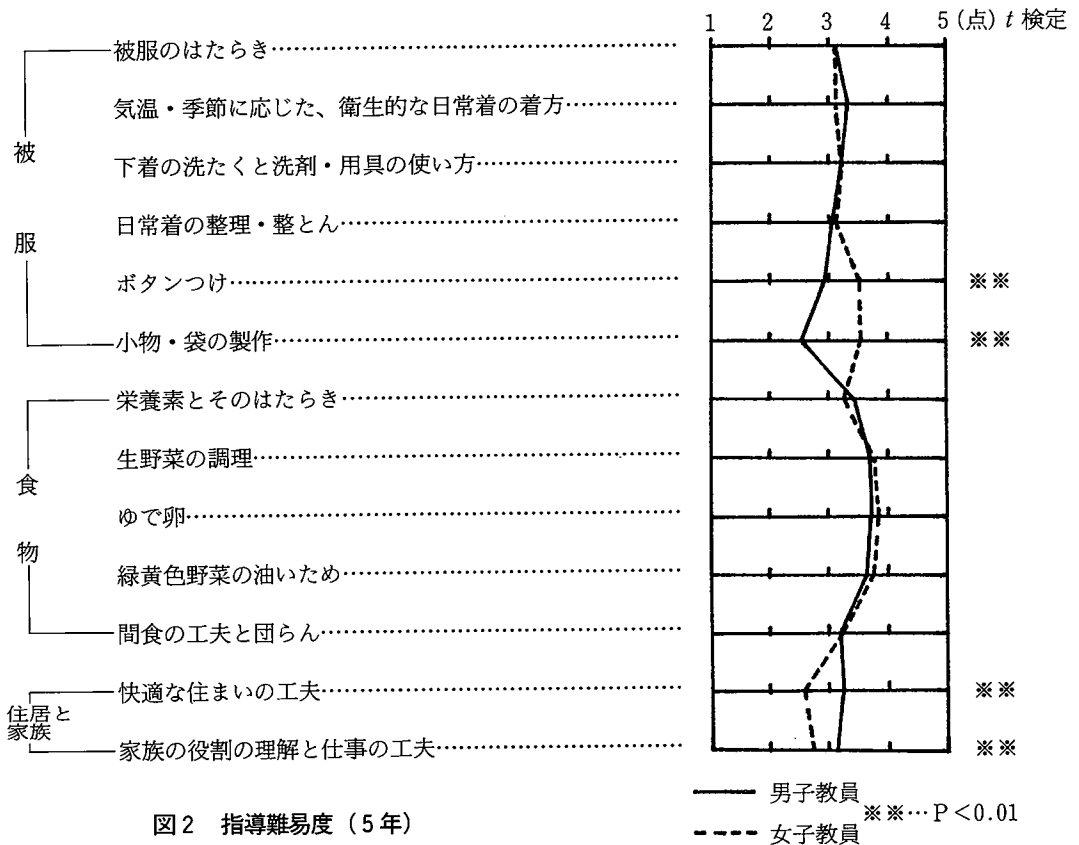


図2 指導難易度 (5年)

「被服」領域では、5年の「ボタンつけ」、「小物・袋の製作」、6年の「ほころび直し」、「カバー・エプロンの製作」で男女間に1%水準の有意差がみられ、男子教員の方が得点が低く、指導しにくいとしていた。近畿3府県の調査でも同様の傾向が認められているので、「被服」領域の実習の指導は、男子にとって指導しにくいものであるといえる。これは、「被服」領域の実習は男子にとって小学校の家庭科で習っただけで、それ以後の学習経験や家庭での実践が少ないことによるものと考えられる。ただ、「被服」領域でも「目的に応じた日常着の着方・選び方」は、男子の方が指導しやすいとして、5%水準で有意差があった。このことは、男子であっても内容や方法を工夫することで指導しやすくなることを示しているものと考えられる。

「食物」領域では、全ての内容が3点以上で「指導しやすい」となっていた。岡山県の調査<sup>90</sup>でも同様の傾向であったことから、男女教員とも比較的指導しやすい領域とみなされているようだ。た

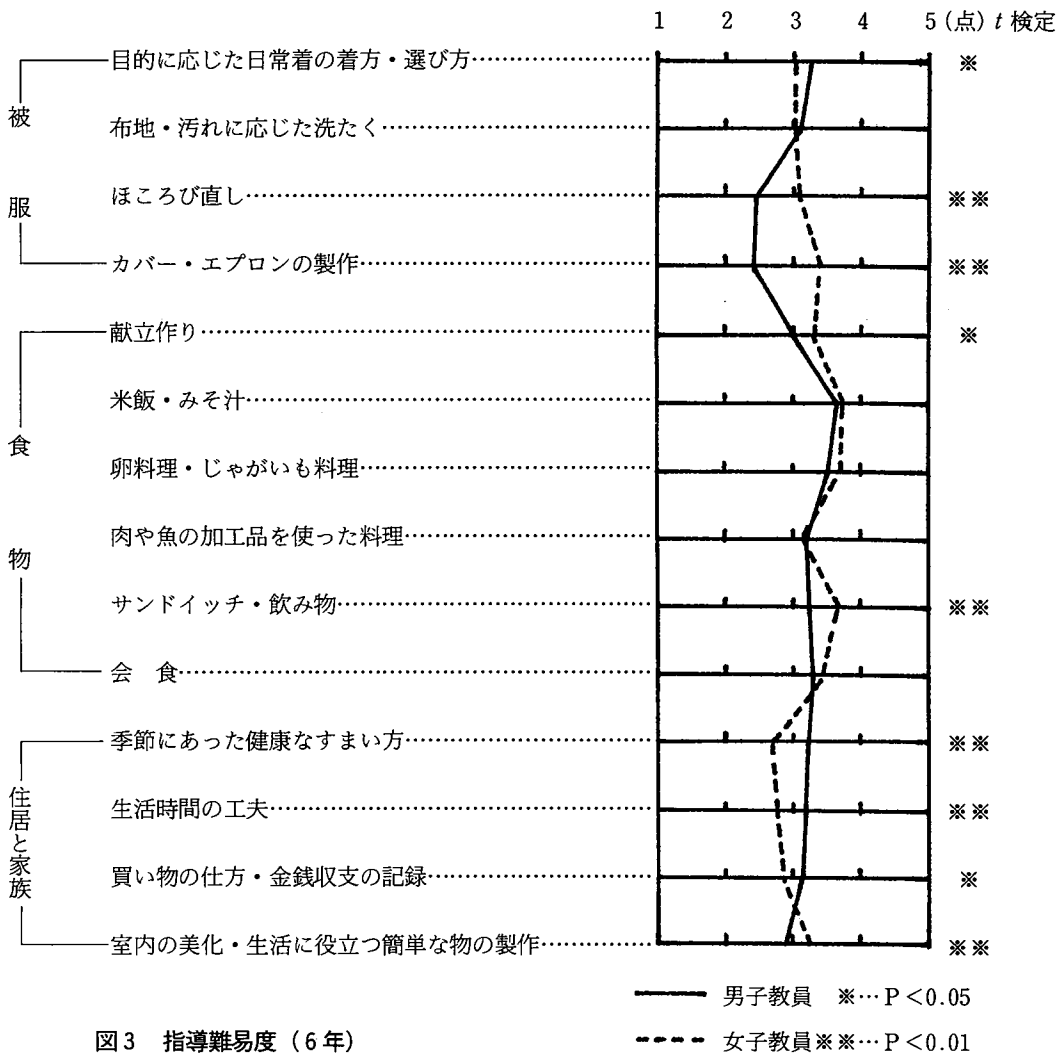


図3 指導難易度（6年）

だ、6年の「献立作り」には男女間で5%水準で有意差があり、男子の方が指導しにくいとしていた。

「住居と家族」の領域は、全ての内容に男女間で有意差があった。6年の「室内の美化・生活に役立つ簡単なものの製作」は、布を使った製作であるためか、男子は「指導しにくい」、女子は「指導しやすい」としていた。しかし、それ以外の5年の「快適な住まい方の工夫」、「家族の役割の理解・仕事の工夫」、6年の「季節にあった健康な住まい方」、「生活時間の工夫」および「買物の仕方・金銭収支の記録」は、男子は3点以下で「指導しにくい」としていた。

このように「住居と家族」では、「被服」や「食物」の領域と異なって、男子の方がむしろ指導しやすいとしており、男子の方が必ずしも全領域を難しいとしているのではないことが理解できた。また、「住居と家族」の領域は、一般的に児童の興味づけが難しいこと、家庭の状況によっては学習

したことを実生活に生かすににくいことなど、他の領域に比べると、内容そのものが指導しにくい状況にある。本調査でも、男子は「被服」に次いで、女子では最も得点が低い傾向にあり、指導のしにくさを示していた。

男女両方に指導しにくいとする内容があるが、全体として男子の方がより深刻な状態であった。これは高校まで家庭科を学習するようになれば、かなり解決する余地のある問題であろう。しかし、当面は「被服」など特に男子教員が指導しにくいとする内容を、大学の教育方法や現職教育などで重点をおいて取り扱い、指導力を高めることが必要である。男子教員の家庭科担当による指導は児童や保護者から強く求められており、指導しやすいとする「食物」や「住居と家族」の領域を手がかりに、家庭科指導を積極的にすすめることが可能であろう。

#### 4. 家庭科のとらえ方

家庭科を担当している教員の家庭科に関する考え方を知るために、意義、目標、方法、内容、効果および担当者について尋ねた。回答はそれぞれの意見項目に関して、5段階に分けた評定尺度を用いて得点化した。すなわち、「大変思う」（5点）、「やや思う」（4点）、「ふつう」（3点）、「あまり思わない」（2点）、「全く思わない」（1点）とし、それぞれの平均値を求めた。結果は図4のようであった。

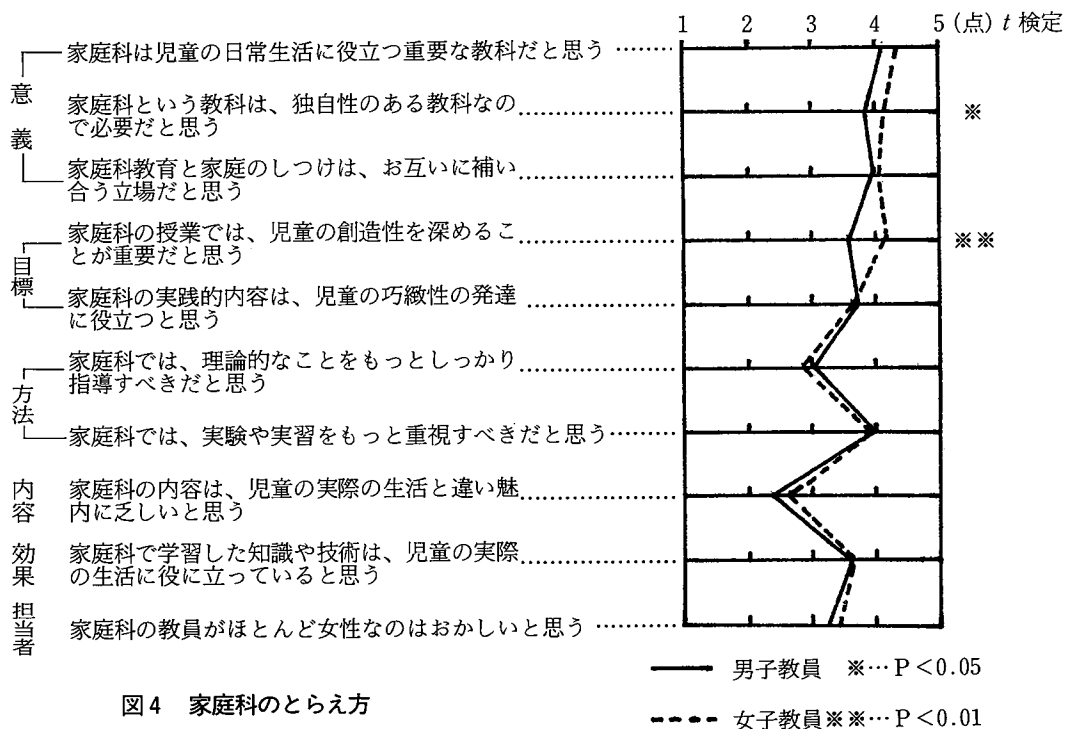


図4 家庭科のとらえ方

家庭科の意義に関する3項目は、他に比べて高い得点になっており、男女教員とも家庭科が児童の日常生活に役立つ重要な教科であること、さらに、家庭科としつけの関連などから考えて、家



家庭科の意義を十分認めているといえる。いずれも、男子と比べて女子の得点は高く、その中で「家庭科という教科は、独自性のある教科なので必要だと思う」は、男子3.9点、女子4.2点で男女間に5%水準で有意差がみられ、女子の方が家庭科の独自性をより強く認めていた。

家庭科の目標に関する項目の「家庭科の授業では、児童の創造性を深めることが重要だと思う」は、男子3.6点、女子4.1点で女子の得点が高く、1%水準で有意差があった。家庭科の学習が児童の巧緻性の発達に役立つということには、男女とも得点が高く肯定していた。

家庭科の方法に関して「家庭科では理論的なことをもっとしっかり指導すべきだと思う」と「家庭科では、実験や実習をもっと重視すべきであると思う」の2項目では、理論と実習の位置づけを尋ねたものである。男子教員の理論重視の得点は、3.1点、女子は2.8点であった。これに対し、実習重視の得点は、男子3.9点、女子は3.8点で、理論よりも実習が重視されていることが分かった。これには、学習指導要領<sup>12)</sup>における家庭科の目標および自由記述から求めた教員が家庭科を指導しやすい理由に、「実験や実習が多いので児童が意欲的取り組みから」と答えたものが最も多かったことから、教員と児童とも家庭科は実践的な学習を重視する教科だと理解していることによるものと思われる。

家庭科の内容に関して「家庭科の内容は、児童の実際の生活と違い、魅力に乏しいと思う」では、男子が2.3点、女子が2.6点であったので、家庭科と家庭生活との関わりを理解しているものと思われる。

家庭科の効果については、男女とも同じで、家庭科で学習したことが児童の実際の生活に役だっていると感じているものが比較的多かった。

家庭科担当者に関しての項目は、男子3.2点、女子3.5点で、家庭科の指導者が女子に偏っていることに対して、男女とも問題意識を持っていた。

以上のように、家庭科を指導している男女教員は、家庭科の意義や目標などの本質をよく理解していることが分かった。ただ、これまであまり家庭科と関わってこなかった男子教員は、女子教員と比較して家庭科の意義や目標の理解度が低いので、今後、現職教育として研究会などで、「家庭生活を中心とする人間の生活を総合的にとらえ、これを創造発展させる人間を育成する教科<sup>13)</sup>」という家庭科教育の本質および家庭科の内容としては、理論に裏づけされた実験・実習の重要性を理解させる必要がある。

これら家庭科の考え方については、小学校免許取得予定の教育学部学生を対象に調査している<sup>14)</sup>ので、さらにその結果と比較してみた。

男子では本調査対象の教員と学生とは、年齢差がそう大きくなく、また教員に家庭科の指導経験が少ないことと関連したためか、ほぼ同様の結果が得られ、家庭科についての考え方に差異がなかった。女子は、教員と学生との間で「家庭科という教科は、独自性のある教科なので必要だと思う」、「家庭科教育と家庭のしつけとは、おたがいに補い合う立場だと思う」、「家庭科では、実験や実習をもっと重視すべきだと思う」および「家庭科の内容は、児童の生活と違い魅力に乏しいと思う」に、t検定により1%水準で有意差があり、いずれについても学生の方が否定的であった。

指導経験のある教員と学生との間で、家庭科の考え方に差があるのは当然のことであるが、特に

女子において、教員よりも学生の方が全般的に家庭科を否定的にとらえていることから、教員養成のあり方が、検討すべき課題であるといえる。

## 5. 性別役割意識と家庭科

家庭科は、これまで伝統的な性別役割意識によって、女子教育に位置づけられてきたので、小学校家庭科担当者についても、性別役割意識の違いによって、家庭科のとらえ方が異なることが予想される。そこで、性別役割意識の違いと家庭科のとらえ方との関わりを明らかにすることとした。

性別役割意識は、総理府の調査項目を参考にして調査し、家庭科のとらえ方との関連を求めた。結果については、男子教員は調査人数が少ないので、女子についてのみ求めた。

すなわち、「夫は仕事、妻は家事に専念した方がよいと思う」、「男の子は男らしく、女の子は女らしくしつけた方がよいと思う」および「女性が職業につくのはよいことだと思う」の3項目についての評定を得点化して項目分析を行ったところ、3項目には妥当性のあることが認められた。そこで、性別役割意識について伝統的な考え方の強い傾向にあるもの（以下、伝統型と略称する）と、民主的な考え方にあるもの（以下、民主型と略称する）から、それぞれ25%ずつ取り出し、この二つの群が、家庭科をどの様にとらえているかの違いを求めた。

その結果、「家庭科の教員がほとんど女性なのはおかしいと思う」について、伝統型は3.2点、民主型は3.8点で民主型の方がより一層肯定的で、*t*検定により1%水準で有意差があった。

さらに、小学校免許取得予定の女子学生の調査結果と比較すると、女子学生では家庭科の担当者に関する項目に加えて、「家庭科は児童の日常生活に役立つ重要な教科だと思う」、「家庭科は独自性のある教科なので必要だと思う」および「家庭科では実験や実習をもっと重視すべきだと思う」についても、民主型の群の方がより肯定しており、性別役割意識の違いによる家庭科の考え方の差異が大きかった。しかし、性別役割意識の違いそのものを表現する担当者に関しては、教員と女子学生とも伝統型と民主型の間で有意差が認められ、家庭科の考え方には、性別役割意識の影響のあることがうかがえた。

以上みられることから、現在のように小学校家庭科が主に女子教員によって指導されるという状況を変えるには、男子教員はもちろんのことであるが、女子教員についても伝統的な性別役割意識を変革することおよび指導力をつけることが課題となる。

学級担任制を基本にしている小学校においても、学習指導の充実を図るには、1989年告示の学習指導要領総則<sup>09</sup>に示されているように、「学校の実態等に応じ、教師の特性を生かしたり、教師の協力的な指導を行ったりするなど指導体制の工夫改善に努めること」は重要である。したがって、このような観点からも、女子教員に偏って家庭科を担当するという実態は検討されねばならない。

## IV 要 約

小学校の家庭科担当教員の指導実態と意識を調査した結果、次のことが明らかになった。

- (1) 家庭科の担当は、男子教員は学級担任が大部分であるが、女子教員は出張、学級担任、専科というように多様な方式で担当しており、性差が明白であった。また、自分から担当を希望したも

のは、指導満足度が高かった。

- (2) 男女教員とも現在どの方式で担当しようが、望ましいとするのは、学級担任が最も多く、出張を支持するものは極く少数であった。
- (3) 男子教員の方が家庭科を指導しにくいとするものが多く、内容別には男子は「被服」の実習を、女子は「住居と家族」を難しいとするものが多く、異なる傾向がみられた。
- (4) 家庭科の考え方としては、男女とも意義や目標をよく理解していたが、民主的な性別役割意識を持つものの方が、家庭科の教員が女子に偏っていることはおかしいととらえていた。

以上のことから、男女教員の性別役割意識を変革することおよび家庭科の指導力をつけることが、教員全体の家庭科担当を可能にする手だてとなるものと考えられる。

本研究を終えるにあたり、調査にご協力いただいた島根県の小学校の先生方に深謝致します。

## 参 考 文 献

- (1) 多々納道子：大学生の家庭科教育観－教育学部学生の場合－、島根大学教育学部紀要教育科学、第22巻2号、34～35、(1988)
- (2) 岡村喜美、宮川満、米川五郎：家庭科教育の研究、329、学芸図書、(1978)
- (3) 西村敬子、渡辺みよ子：小学校家庭科の担当方法（第2報）－家庭科担当教員の実態と意識－、日本家庭科教育学会誌、第21巻、1号、56、(1978)
- (4) 西村綾子：岡山県の小学校における家庭科教育－教員の現状と問題－、岡山大学教育学部研究集録、第54号、33、(1980)
- (5) 貴田康乃、小松宏子：近畿3府県小学校における学級担任の家庭科指導実態（第1報）－男女別・意識別－、日本家庭科教育学会誌、第27巻、2号、28、(1984)
- (6) 高森壽：小学校家庭科指導者の実態、熊本大学教育学部紀要人文科学、第35号、133、(1986)
- (7) 全国小学校家庭科教育研究会、全国調査のまとめ、62、(1976)
- (8) 前出 (3) 57
- (9) 前出 (5) 29
- (10) 武藤八重子、西村綾子：岡山県における小学校家庭科教育の実態(第2報)、日本家庭科教育学会誌、第29巻、3号、11、(1986)
- (11) 松木侃：小学校家庭科教育における男子教員の諸問題について、日本家庭科教育学会誌、第15巻、16、(1974)
- (12) 文部省：小学校指導書家庭編、2、東京書籍、(1983)
- (13) 日本家庭科教育学会：家庭科教育の構想、18、山崎印刷、(1977)
- (14) 多々納道子：小学校家庭科の指導意識－教育学部学生の場合－、教科教育研究論集、第4集、25～26、島根大学教育学部、(1990)
- (15) 総理府：婦人の現状と施策 [国内行動計画第二回報告書]、139～143、ぎょうせい、(1980)
- (16) 熱海則夫、菊川治：改訂小学校学習指導要領の展開総則編、73、明治図書、(1989)

# Actual Conditions and the Consciousness of the Teachers toward Homemaking Education in Elementary Schools (1)

— in Case of Teachers in Charge of Homemaking of Shimane Prefecture —

by Michiko TATANO The Faculty of Education, Shimane University  
Yosiko ANZIKI Hokuyo Elementary School

The purpose of this paper was to investigate the problems exist teachers in charge of homemaking courses in elementary schools. The results were as follows:

Compared with female teachers, male ones, the ratios of homeroom teachers having charge of homemaking was higher than of that in females in Shimane prefecture. Significant differences in systems of teachers in charges of homemaking were found between male and female. Most of teachers considered that homemaking should be taught by homeroom teachers in future.

Male teachers found it is difficult to teach the area concerned with clothing construction, on the other hand, the areas concerned with the family and the residence, in case of female ones. Both male and female teachers comprehended the educational values of homemaking. Female teachers had more democratic sex-role perception regarded home-making education was taught mainly by female teachers as critical.

## 英 文 要 旨

この研究の目的は、小学校家庭科の担当教員について、家庭科指導上の問題点を調査・研究するためのものである。結果は、次の通りである。

島根県において、男子教員は女子教員と比較して大部分が、学級担任として家庭科を担当していた。男女教員の家庭科担当方法には、有意差があった。教員の大部分は、今後担任教員によって、家庭科が担当されることが望ましいと考えていた。

男子教員は、被服領域、女子教員は家族と住居領域の指導が難しいとらえていた。男女教員とも、家庭科の教育的価値を理解していた。民主的な性別役割意識を持つ女子教員は、家庭科が女子教員によってのみ指導されることには、問題があるとみなしていた。